

# 多摩ニュータウンという 暮らしの実験

Experiment in Life in Tama New Town

金子 淳

KANEKO Atsushi

はじめに

- ①都市計画の実験／住宅の実験
- ②“初期不良”に抗する「暮らしの実験」
- ③“住みこなし”という「実験」

おわりに

## 【論文要旨】

東京西郊の稲城市、多摩市、八王子市、町田市にまたがる多摩丘陵に開発された多摩ニュータウンは、開発面積約3,000haという日本最大の規模をもち、東西14km、南北2～4kmにおよぶ。1965年に都市計画決定、1971年に第一次入居が開始された多摩ニュータウンは、その計画段階から現在に至るまで、その巨大さと新奇性ゆえに常に「実験」と結びつけながら語られてきた。

本稿では、多摩ニュータウンのイメージに常に付きまとう「実験」という言葉に注目し、その実験の主体について、①都市計画に関する基本的な方針を立案し、マスタープランや都市施設（住宅・団地・道路・公園・学校等）の整備計画などを作成する開発事業者・施行者・都市計画者による「都市計画の実験」、②より詳細にニュータウンを構成する住宅や公園など、各都市施設の意匠・設計を担う建築家による「住宅の実験」、③ニュータウンに住み始め街づくりの主体となる住民による「暮らしの実験」、という位相の異なる3つの立場を設定した上で、それぞれの主体による「実験」について検討した。

なかでも、ニュータウンという新しい住宅環境に対応し、社会関係を築いていったニュータウン住民による「暮らしの実験」を重点的に取り上げ、自分たちにとって住みやすい環境を獲得するため、実際にどのような活動や実践が行われたのか、その模索の足跡をたどった。その結果、都市計画家や建築家によって周到に計画され、与えられた環境に従順に行動するのではなく、むしろ都市計画家・建築家の思惑を超えて、与えられた環境を自分たちのものへと主体的に読み替えていく住民の姿が浮き彫りになった。

【キーワード】 ニュータウン、団地、住宅、実験、都市計画